

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

<Y G>

情緒的不安定・主観的・社会的不適応のタイプは一般的にみられ、そこに外向的・衝動的な方向か、非活動的・非主導の方向かが加わっている。

<S C T>

父母の項に全然記入がないか、きびしいか、テストの結果をとてても気にするか、逆に甘やかしすぎの傾向がうかがわれる。

<A S S>

家庭環境—外面的にか、その診断値が他の生徒よりも、悪いようである。

<行動評価>

Bの評価をもらっている者が大部分である。A S Sの結果とほぼ対応するような感もする。

㉞ 保護者は、一般的にみた場合、現年の生活や人間像については、ほぼ常識的で健全な期待をもっている。職業についても、その大半が中産階級としての「サラリーマンか技術者」といった期待像をもっている。しかし、大学については、子弟の能力をこえて、国立・有名大学への願望をもっているようにみえる。

㉟ 子供は、親の期待や不安の中で、比較的のんびりとすごしているようである。

㊱ その中で、厳格すぎ、期待しすぎ、又は甘やかしすぎの——とくに父や母の情緒的不安や不一致が子どもとの関係を危険領域にまでみちびいてしまうものもある。

㊲ 中学時代までに、その関係を健康に回復してしまふことが望ましい。

㊳ 高校においては、内面的自我の強化と独立、友人関係の健全化において、それを善くしていく努力が必要であろう。 (中尾・佐藤)

IV. 結 論

以上のことから、結論として次のようなことがいえるように思われる。

生徒	親子関係のタイプ	気質傾向 (Y G)	S C T 文 例 (「 」内は要約)	行動評価
a	父—厳格, 溺愛 母—期待, 不安	非活動的 非主導的	父—やさしいけど、おこるとこわい。 母—やさしいけどこわい。	A…2 B…11
b	父—期待, 干渉 母—拒否, 期待, 不安	主観的 情緒不安定	もしも私が英語を100点とったら母にどんなによろこぶでしょう。	A…4 B…9
c	父—厳格 母—干渉, 不安	情緒不安定, 衝動的 外向, 社会的不適応	父母についての記入なし (抵抗感?)	A…5 B…8
d	父—溺愛 母—期待, 干渉, 不安	主観的, のんき 情緒不安定	小さい時私はわがままで手がつけられなかった。 父—「やさしい」、母—「やかましいのできらい」	A…6 B…7
e	父—厳格, 溺愛 母—不安, 干渉	ノーマル型ただし 外向性強し	父—よく勉強しろといひす。 母—やさしい時やこわい時やいろいろあります。	A…8 B…5
f	父—厳格, 不安 母—不安, 厳格	社会的不適応 衝動的外向	もしも私が先生ならばげしくごいてやりたい。 父—記入なし, 母—とてもやさしい。	A…10 B…2

第 17 報 社会人としての生徒のつけ

「一つの小さなころみ」

この数年来、本校では中学生の人間としての成長を願うしつけの基盤を「少くとも他人に迷惑をかける行為はしない。」ことにおいて、H・Rを中心に、教室、生徒ともに努力を続けている。たまたま、研究室が中学一年のH・Rと隣り合っていることから、指導部の

末席をけがす者として、私も毎年入学早々のまだ制服のなじまない新入生に「中学生になったのを機会に人の迷惑になることをやめよう、皆のためになることをしようではないか。」と呼びかけてきた。生徒たちはいくらか面倒な感じもするが、それが大人に一步近ず

いて行くのだという喜びをもみとめてその気になるようである。

しかし昼食時になるとパンを買うために人をつきとばしても走って行くし、廊下に水がこぼれてすべっころんでも、それを見た人はいうに及ばず、ころんだ本人でさえ言われない限り自発的に拭くことをめったにしない。注意すればそれ程いやな顔もしない所をみると、結局どのようなことがお互の生活を気持よくするに役立つ行いであるかということに気がつかない場合が多いように考えられる。

そこで本年度は五月半ばになって担任の了解、協力を得て「どんな小さいことでもよい、皆のためになることを一日に一回でもいいから実行して、それを簡単にノートに記しておこう、そのノートを時々見せてもらいたいのだが……。」と提案した。これは特別の反対もなく受け入れられてそれ以後一週間に一回80冊余りのノートを見ることになった。形式にこだわらない方がいいと思い、ノートの大きさも書き方も全く自由にしたいので、大小様々、縦書きもあり横書きもある。書いてあるのは「水道の蛇口が上向きになっていたので下に向けておいた」（水をのむために蛇口を上にもむけ次の者が急に勢よく栓を開いて噴き出した水で廊下をぬらす。）「教室の中でゴミを拾った。」「バスの中

で荷特を持ってあげた。」等とごく些細なことではあるが、ともかく全員一日一回は何かをしている。始めの一週間と、実施後二ヶ月近くたった夏休み前の一週間について、二、三の項目を拾ってみると次のような表になる。

表1 調査人員87名について

数字は1週間平均の1日の回数

	水道の蛇口を下にむける	教室等でゴミをひろう	乗物の中で席をゆずる	乗物の中などで荷物を持つてあげる	階段の石をきちんとする
5月22日 ～28日	33	12	3.5	9	2
7月10日 ～16日	12	13	3.4	9	1.5

水道の蛇口の向きをなおす回数が減っているのは各自が気をつける（水をのんだあと下にむけておく）ようになったためである。「階段の石をならべる」というのは回数こそ少いが、登下校の際全員が必ず通る箇所であるにかかわらず自らすすんで道路工事(?)をするのはこの一年生だけであるのは注目していいことだと思う。

更に始めと半年後とを一週間ずつを表にしたのは次の通りである。

表 2

月 日	水道の蛇口の向きを下にむける	廊下教室等でごみをひろう	机いす等のせいとん	黒板のよひれをふいておく	窓をあける窓をしめる	牛乳びんのせいとん	階段の石をきちんとならべる	禁止事項について友だちに注意する	乗物の中で老人等に座をゆずる	乗物の中へ重い荷物を持つてあげる	家の手伝い新聞のとり入れ(そうじ・ふとんしき)	トイレパターを入れる	たばこの吸からの火をけす	その他
5. 22	38	11	4	5	4	8	3	2	4	10	1			5
5. 23	45	15	8	3	5	7	1	3	4	8	0			7
5. 24	37	20	9	4	3	10	0	4	5	7	1			7
5. 25	48	10	5	6	5	11	4	3	3	11	2			8
5. 26	29	18	4	5	3	12	2	4	4	11	0			7
5. 27	28	11	4	2	3	5	2	3	2	12	0			4
5. 28 (日)	4	2						3	3	5	2			6
週 平均	33	12	5.7	4.1	3.8	8.8	2.0	3.1	3.5	9.1	0.9			

69人

11. 13	12	4	2	2	2	1		2	5	7	3	3	2	5
11. 14	9	6	3	1	2	0		1	4	8	2	0	1	4
11. 15	7	5	3	1	1	0		2	5	10	3	2	1	7
11. 16		14	(遺)		足)			1	3	8	2	1	2	5
11. 17	8	5	1	1	3	1		1	2	8	2	1	1	6
11. 18	7	3	2	1	1	1		3	2	9	1	2	3	3
11. 19 (日)		2						3	3	6	6		2	5
週 平均	8.6	5.6	2.2	1.0	1.8	0.5		1.9	3.4	8.0	2.7	1.5	1.7	

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

牛乳びんの整頓の回数が少なくなっているのは売店に係りの人が一日中居るようになり（一学期は4時間程しかいなかった）整頓に生徒の手が殆んど要らなくなったためである。始めにはなかった項目のトイレトペーパーの取りつけや、たばこの吸がらの火を消すことなどがふえている。これは次の表にかかげる調査で、生徒自身も述べているように「役に立つ事」が何であるかが少しづつ分りかけた一つのあらわれと見てよいと思う。たばこの吸がらについては「大人は火の用心とか、街をきれいにとか口では言いながらどうして火のついたまま道ばたに捨てるのだろう。」とふんがいしながらその矛盾をついている。

つぎに「ノートに書く」ことをどのように考えているかを聞いた結果は下の通りであって、大多数の者はノートに記すことの意義をみとめている。

表3(1) 調査人員 85名

実行したことをノートに書く必要はない	7
実行したことをノートに記した方がよい	78
(自分の記録としてかいておく もっとよく出来るようになるまでは書いた方がよい)	

表3(2)

ノートに書くようになってから他人への迷惑なこと、人の役に立つこと等についてよく気がつくようになりよいことは実行するようになった	79
前とかわらない	6

中学の全学年について調べた結果は次の表となる。

表4

1) 社会生活に於ける小さな善行について考えているか。 [表2]

学年	3年 (89人) (%)	2年 (88人) (%)	1年 (82人) (%)
1) いつもそのことを考え、行動している	20 (22)	6 (7)	8 (10)
2) 時々を考えてそのように行動する	67 (75)	67 (76)	69 (84)
3) 考えはするが何もない	2 (2)	13 (15)	5 (6)
4) そのようなことは考えたことがない	0	2 (2)	0

2) 乗物の中で席をゆずったり、ごみを拾ったり、身近な小さな善行についてどの程度実行しているか

[表3]

学年	3年 (%)	2年 (%)	1年 (%)
1) いつもすすんで行う	22 (25)	19 (22)	33 (40)

2) 時々を行う	65 (73)	66 (75)	46 (56)
3) そのようなことはした方がいいと思うが面倒であったりしてしない	2 (2)	3 (3)	4 (5)
4) そのようなことをする気は全くない	0	0	0

実行面で一学年の40%の者がいつもすすんで行っていることは、三年生の25%、二年生の22%に対して有為の差がみとめられると思う。

さらにこのような「小さな善行の実行についてどんな考えをもっているか。」を各学年に聞いてみる。(自由に書かせたあとなるべく生徒の言葉を用いてまとめた。)

3年・人間は社会の集団からはみ出しては生きて行けないから社会の役に立つことをするのはあたり前のことだ。(56%)

- 人にすれば結局は自分のためにもなるから…。
- 何もしないバカな大人の目の先であたり前のことをしてそのおろかさを思いしらせる。
- 実行しようと思うがなかなかむづかし。
- 自分のことを考えて不都合の時はやらないが、特別不都合でなければ必ず実行する。
- 自分の気持ちに悔をのこさぬように実行する。
- 大人で他にずい分迷惑をかける人がいるから注意してほしい。

2年・このようなことは当然のことである。社会のエチケットである。(52%)

- 大ていの大人はしないから自分たち中学生がしっかりとやる。
- そうしなければ自分の気持ちがすまないから、自分の気持ちがいいからする。
- 自分はやりたくないがまわりの様子からしなければならぬからする。
- 自分をぎせいにしてまではやりたくない。

1年・自分の力は小さいが少しでも世の中のためになることだからする。(62%)

- 反射的に行う。
- やったあとは気持ちがよいからする。
- 誰かによいことをするとその人が大へんよこぶので、そのよろこぶ顔がみたくてする。
- 何となくする。
- 大人のは悪い人がいるからこまる。

このようにどの学年の生徒も社会に対する小さい善行は当然行うべきことだからするのだと、その理由に多少のちがいをもちながら半数以上の者が実行を心にかけていることが分る。また各学年とも大人への反撥をあげているのは今後の指導について我々の考へなけれ

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

ばならない一つの問題だと思う。

1年生に対してよいことをして気持ちがよくなったとか、うれしかったとかいう経験を具体的に書かせてみると、「乗物の中で席をゆずってあげてお礼をいわれた。」「乗物の中で重い荷物を持ってあげてよこされた。」と記している者が大部分であり、中には「高校生のかばんを持ってあげようとしたら生意気だといわれ、頭にきた。」というのもあった。「ノートを返してもらおうと必ず先生が何か書いて下さっています。それをみるのがたのしみでもっとよいことをしたいと思います。」とあるように多くの者は自分のしたことが他の人にみとめられたり、礼をいわれたりすることがうれしくて、それがはげみになって何かしようという気持ちになっているのが現状である。「水の流れ口が詰まっていたので、ごみをとったら気分がすかっとした。」とか「ごみを拾うのはあたり前のことだからほめられたりするまでもない。」と述べているのは僅かにすぎないが、彼等の年齢から考えればそれでよいのではな

いかと場う。

子供たちのこのような行動の一つ一つを大切に育て、やがては皆のためになる仕事をする事自体に喜びをもつことが出来るようにして行きたい。ノートに記さなくても、人の迷惑になる行動はつつしみ、社会のためになることなら一寸した小さいことでも気軽にこなえるような習慣の自然に身につくことを心から念願している次第である。

なお昨年の初秋一ヶ月半程の間、欧米をまわった折に、それらの国々に於いて、他人への迷惑、公共の場所での行動のあり方等はごく小さい中に家庭できびしく訓練されていることを知る機会がしばしばあった。基本的なことは小学校入学までに習慣づけられているように思われた。中学生になってからこのようにあらためて取り上げるまでもなく、もっと低学年に於ける家庭内でのしつけのあり方、学校教育と家庭教育の関連も合せて考えなければならぬ問題だと思う。

(新村)